

【特集：実行機能に注目した支援・介入】 寄稿

# 実行機能という視点からの支援

安住 ゆう子

## 1. はじめに

筆者は学生の頃から発達に偏りを持つ子ども達とかかわり、支援させていただいている。支援の軸として、まず、心理検査を行いその子の認知特性を踏まえその子の強みを活かすことの大切さを学んだ。次にその子の興味関心や動機付けを考えることの大切さも実感した。そして長く彼らとかかわる中で7、8年前に「実行機能」という枠組みで彼らの困り感を捉えると、とてもしっくりくることを知った。知的に高くても生活面や学習面にその能力が活かされず、「やらなきゃいけないことはわかっているんだけど、どうやったらいいんだろう…」「急に予定が変わっても合えられない」「どうしたらいいか忘れちゃった…」というプランニングやシフティング、忘れないようにすること等にとっても苦戦しているのだ。今まで試みてきた支援との重なりを多く感じ、先行研究を元に実行機能の実践ワークも出版させてもらった。2019年にマクロスキー博士の講演をLD学会で聞くことができ、さらにもっと知りたいと思い、明星大学の講演を拝聴する機会にも恵まれた。マクロスキー博士の話は興味深い内容が多くあったが、特に「実行機能マネージャー：いつするのか」と「実行スキルマネージャー：どのようにするのか」の両側面で捉えることにとても納得がいった。知識としては知っているのに使うタイミングを逸している彼らに多く出会っているからである。ま

た、「実行コントロールの介入の連続性」に関して、内的コントロールがより効果的ではあるが、外的コントロールから内的コントロールに徐々に移行させる「橋渡し方略」の考え方のお話もうれしかった。私も、きっかけは環境調整による外的な支援であってもそのよさを本人が実感して自ら主体的に実践するようになったら、つまり例えば始めは支援者がタイムタイマーを使うように用意したが、子ども自身がこれは便利と自分から使うようになれば、それはもう内発的動機付けによる方法である、このような環境調整が望ましいといつも考えているからである。今回、このような実行機能という視点で行った指導事例を紹介させていただく。

## 2. 実践報告

### 2.1 指導内容

書字の困難さを持つ児童への学習支援：201X年4月～201Y年3月 月2回 50分 19回

### 2.2 対象児の概要

ASD、書字障害の疑い及び発達性協調運動障害(幼児期)の診断を持つ小学校3年生男児。開始前にアセスメントとして、WISC-IV、KABC-II、WAVESを行った。知的発達水準は平均を上回っ

たが偏りが見られた。真面目で知識の習得が良好であるが、手先の不器用さがあるとともに視覚的ワーキングメモリー、視覚模倣が弱く、シングルフォーカス、わかりやすく話せないなどもある。融通に欠けるところがあり、アドバイスを取り入れることはまれである。一度引っかかるとそのことに過集中してしまい時間や周りを意識することが難しく、ふと気づくと今度は過度に焦ってしまうこともある。また苦手なこともある程度わかっているものの、「大丈夫」とそのままにしてしまうことも多い。実行機能の中でも「シフティング（柔軟性）」「モニタリング（行動確認）」「プランニング（計画を立てる）」「時間の管理」の苦手さがあると考えられた。

## 2.3 開始時の保護者と本人の要望

保護者は「文字を丁寧に書けるように」「画数の多い字を正しく書く」「先生に言われた方法をやってみる」「わかりやすい話ができるように」等を希望し、本人は選択肢から「字を速く書く」「コンパスの使い方」「目と手のゲーム」を選んだ。

## 2.4 主な指導内容

1対1の個別指導で、①フリートーク ②手先や手首の巧緻性や筋力を高めるための運動 ③漢字総まとめプリント、間違えやすい漢字リスト作り、コンパスの練習、ローマ字漢字等の書字指導 ④原稿のメモ作りの宿題を元に壁新聞作り ⑤前期はビジョントレーニングのタブレット教材、後期は目と手の瞬発力や視覚記憶、視覚探索、空間把握等の要素があるゲーム ⑥終了後毎回15分ほどの保護者面談を行った。

## 2.5 指導経過と考察

### 【シフティングを意識した取り組みとその結果】

(1) 壁新聞は、待合室の壁に掲示し、感想やアドバイスを求める用紙を置いた。次の号を書く

時にそのアンケートを読み、何に注意するかを整理してから書いた。これを繰り返すうちに本児の作文の傾向に以下の変化が見られた。指導初期は事実の羅列、句読点の少ない長文、細かい内容のこだわりがみられ、他者の視点も少なかったが、指導継続の中でアンケートのコメントを元に接続詞の使用、句読点を入れること、馴染みのないことばに解説を入れること、筆者の感想を含めること、文字を丁寧に書く等を心がけ、内容文字表記ともに読みやすくなってきた。

(2) 漢字のごろ合わせの覚え方を行うなかで徐々に指導者の案も取り入れるようになった。

【考察】

新聞作りという他者に自分の作品が注目され、その場にはない第三者からの肯定的な感想に加えての助言という形式が受け入れやすかったようだ。

### 【モニタリングを意識した取り組みとその結果】

- (1) 初回にこの1年間で自分のやりたいことを選び、最終指導で振り返りを行ったところ新聞への自己評価は「やってよかった」であった。
- (2) 間違えやすい漢字リストを作り、どのような字を自分が覚えにくいかが意識できるようにした。「こういう字がこんがらがるんだよね」と自分で画数の多い字を意識するようになった。
- (3) 「壁新聞作り」では見直しを行い、くせ字を意識して直そうとするようになった。またアンケートのお礼文では「字を書くのはあまり得意ではないので」と素直な自分の気持ちを書いていた。

【考察】

新聞を掲示するという間接的に「相手に見られる」という設定により、自分を振り返りやすい状況が作れた。それとともに、よりよい物にしたいという気持ちから目の前にいる筆者の助言を聞き入れようという回数も増え、書字に関しての指導効果が見られた。

## 【プランニングや時間の管理を意識した取り組みとその結果】

- (1) 「手首の体操、記録に挑戦」では始めに時間を予想してから行った。
- (2) 「壁新聞作り」では当初は間で時間を伝え、指導中期では自分で時計を見るように促した。構成や、分量について確認してから大枠を書き出すことを続けた。後期には自分で時計を見ながら完成するようになった。
- (3) 予定を書き出すことが般化し自宅の学習机に本人の希望で「やることリストボード」を置くようになった。

### 【考察】

繰り返す中で時計を見る習慣が付き、時間を意識し効率よく終われると最後のゲームの時間もとれるというメリットも実感したようだ。今月のイベント等、先を見越した報告をしてくれるようになった。

学習指導を行うにあたって、習得状況や認知特性の把握とともに、子どもの実行機能の特性を踏まえることも大切だと考える。本児の今後の課題としては、書字指導の継続とともにまとまりのある話し方や対人面でも柔軟に思考や行動調整ができるようになることが考えられた。

## 3. 最後に

実行機能という概念はとても広いが、この枠組みで私たちの生活や学習を見直すと今までの支援方法が新たに価値づけられたり、新しい対応方法がイメージできたりもする。今後マクロスキー博士が作られたMEFS(McCloskey Executive Function Scales) や BRIEF(Behavioral Rating Inventory of Executive Function) 等の行動評定尺度の日本語版が出版されることで実行機能という領域がより具体化され、発達に偏りを持つ人の支援の視点として根付いていくことを願うし、私も実践を重ねていきたいと思う。



図1. 指導初期の壁新聞



図2. 指導後期の壁新聞

### 【文献】

NPO フトゥーロLD 発達相談センターかながわ (2017) :  
実行機能能力ステップアップワークシート：体験しながら育もう自立に向けてのアイテム10. かがわ出版.

\* 本事例は2019年LD学会ポスター発表で発表した事例である。掲載にあつては保護者の同意を得ている。